

最近洋畫界

木下、木下、木下

○梅原良三郎氏の作品展覧會

此展覧會は、去る十月五日より今日まで、神田の「ギナス俱樂部」で開催せられた。千九百八年より今年に至るまでの五年間の製作品（油繪及びバステル畫）百餘點を年代の順に陳列したから、作者の世界（繪畫的感覚の世界）の發展を概観することが出來て愉快であつた。

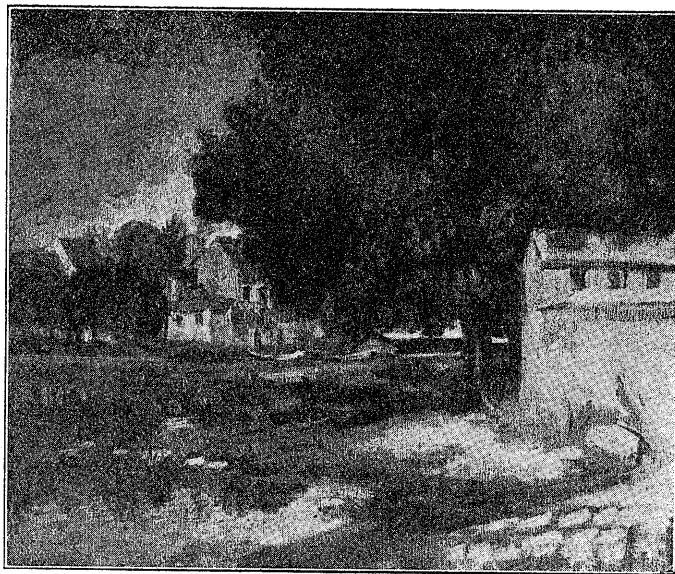
元來我々の驚嘆や、思索の對象になるものは常に變化である。——Devenirである。圓く軟い、膠のやうに濕うるんだ晩春の淡紫色が五月の牡丹の大きな真紅となるところに、我々生物の同感するに足る性命がある。然しそんな自然の不可思議でも常套コンセンシヨナリズムと目的論テレオロジイとが之を通俗なものにする。だがこの成長の流動的な本質の四圍の自然の變化よりもつと顯著にそして感覺の生々とした對象として味はうことの出來るのは、藝術家並に藝術鑑賞家に許された特權である。私は固よりプロ

バガンヂストの過激な興奮をば好まない。例へば十九世紀の印象派を、唯外象の感覺に囚はれたる皮相的觀察者だと嘲る立體派の哲學者の議論などには不快を感じてゐる。然しこれらの諸種の畫派の繼續に對して、常に性命の眞相たる成長——變化の發現を喜ぶのである。而して一幅の畫幀の上にもこの變化を表現しようとする最近の努力があるのではないか。

今日我々は靜かに、この展覧會の作品の一つ一つに眼を滑らした。そして同感若くは感情の融合を其本質の一とする藝術は、獨逸の學者の自己投入インヴェンツィオンといふ意味で、我々觀者の心に、作者の變化——成長の行相を、自分のものゝやうに味はくしめたのである。

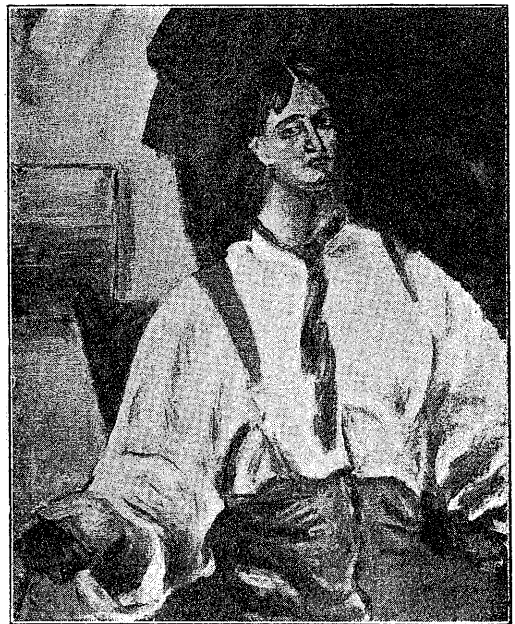
凡て藝術鑑賞の最初の一瞥は敵對の状態である。作品と觀者とは、未だ橋を得ざる彼岸と此岸とである。群集の渡る橋は其竣成までに長い時が懸る。群集がロマンチックから印象派に橋を渡した時に、彼等に取つては突然と、ポエンチリズムの島が湧出した。そしてこの Phlogenie を批評家の Ontogenie が繰り返へさないだらうか。私は敢て言ふことが出来る。この展覧會の最初の日の一瞥は私に取つてシャオスの顯出であつた。「何とふしだらな繪だらう」「何と云ふ崩れた形だらう」「何處どこに物質があるだらう」。さう私が最初考へたやうに、畫に慣れない多くの人が叫ぶだらう。今日私は再び觀た。そして考へた。まあこんな畫もあつたのかしら。そして私は初め「薔薇の帽

子」(2)を觀た。ああ、中々綺麗な色だ。そして毛衣や羅紗の表面のやうな觸感の世界だ。段々私の樂器は合奏の調子に合つて來た。我々は柔く肥えた女の胸を目の前に見る。そしてルノアル振りの目許を認める。強い色の柔く暗い諧調アラビヤニヤム、猫の毛皮の觸覺、ナイフで芋の葉の莖を切るやうな筆觸の感じ、——さう云ふ世界の中に紅と、一種の綠



梅原良三郎 筆 (二其) — レ モ

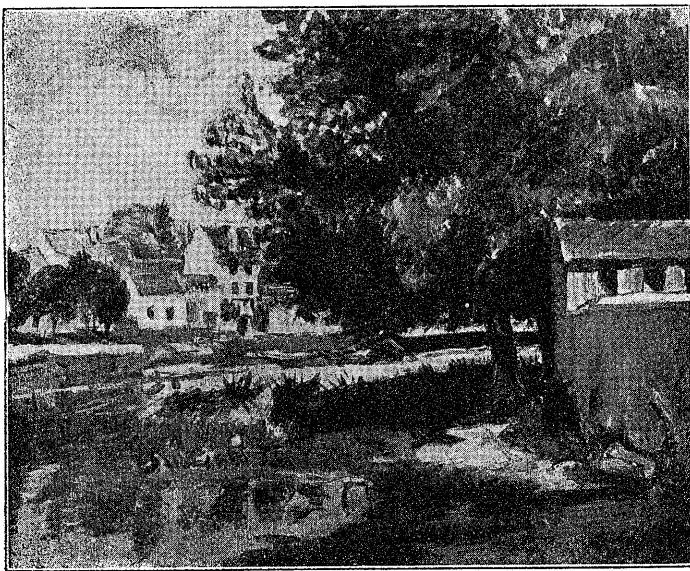
との「グレエの森」(33)を見出す。「ゲルンゼエの島」(38)、「岩」(39)を見出す。また「グレエの春雨」(47)を見出す。既に我々はあまりに柔いモルヒデツサの世界に慣れて居る。そして突然と「アネモオン」(64)、「自畫像」(63)の前に立つたときには、急に全く別世界のデモンに壓されたやうな心の驚きを感じた。畫面にルノアルの燈光の外に



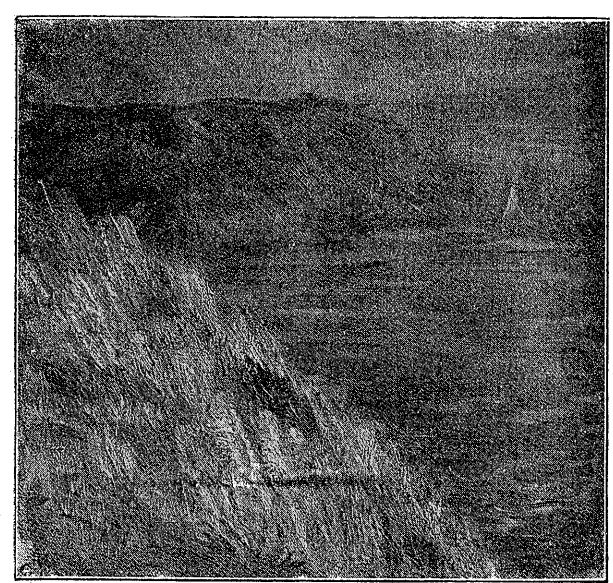
も一つの新しい光が指す。さう明るくはない、併し対象を堅く、單純に見せる。ポオル、セザンヌの光である。屢々我々の心はこの二の光源に迷ふ。静物と、風景とに於て、往々新しい光と、色調と、筆觸の感覺が勝を制す。然しこの刺戟はいつか舊の氣稟キレイに消融せられる。「讀書」(78)はこの氣稟の完成である。そして「女、裸體、讀書」(70)、「モレエの風景」(75)は第二の新しい消融から産出せられて、そしてまた Devenir の階級を一つ登つたのである。だが知つたと云ふとはまだ知らないと思ふことではない。ルノアアル風のモルビデツサと、ツウシユとを持つた Virginie はもう過去に屬する。一種の醗酵が行はれるとして自覺が来る。「目的」が捕へられる。それに對して効果ホツケが集中して「單純サンジュン」と「強 度キョウド」とが加はつて来る。「モレエ」(83)の立木ももとのやうに暗くはない。且或一つの主な効果の外のいろいろの小さい効果には顧慮

しなくなる。外象の物質の世界からはまた重量と、容積と、膨らんだモルビデツサを持つた屬性が中心となる。「太き腕の女」(85)、「倦怠」(84)、「半裸體」(85)は、さう云ふ新しく發見した價値の世界を宣傳する氣分が純熟溫藉な「讀書」(78)など違つた一種の新鮮味を將來する。この最近の、そして我々の今に近い感覺世界——變化ヂョウニョルの新しい階級に來て回顧すると、もう或者は五年前の作品になつてゐる。

然しこの回顧が何等の悲哀の情趣をも持つて來ないで、皆今の状態になる變化の階段であつたと思ふときに一種の深い樂天的の氣分を湧かしむるのであつた。(14. X. 1913.)



筆 郎 三 良 原 梅 (一 其) - レ モ

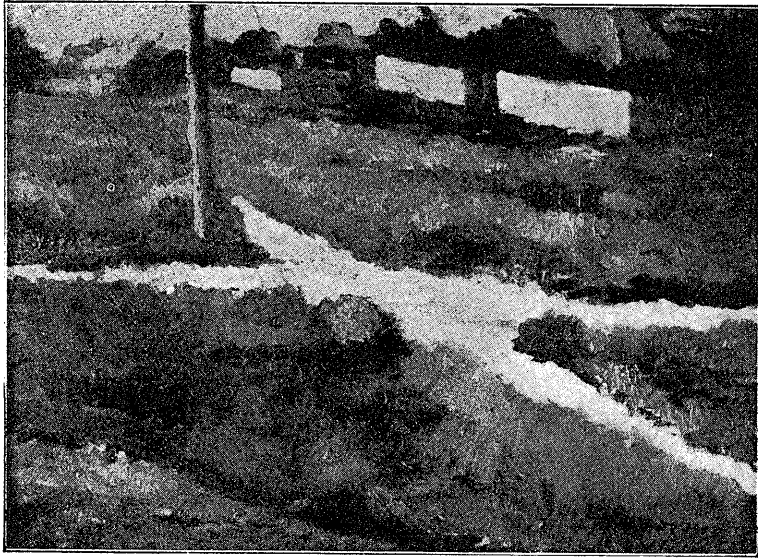


筆 上 同 島 - ゼ ン ル ガ

○再び岸田劉生氏の 作品に就て

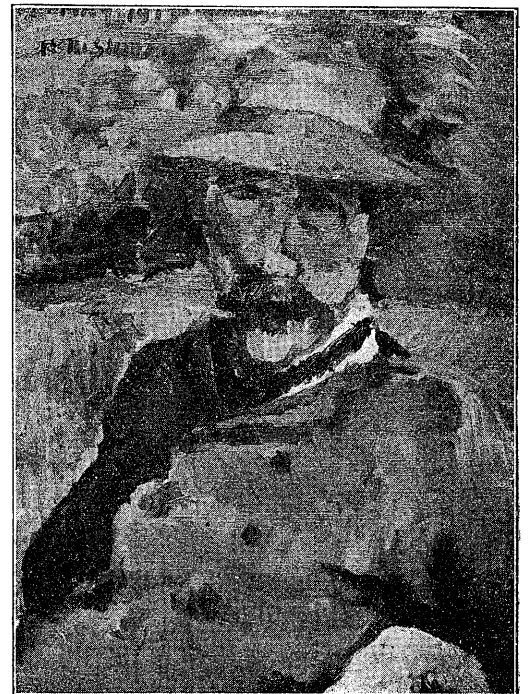
同氏の作品に就ては雑誌「藝術」の四月號に於て云々したことがある。其後其畫致に多少の變化があるさうであるから今度の展覽會(生活社主催、ギナス俱樂部、大正二年十月十六日—廿二日)を機會として一言附加しよう。即一層一方向に純化して來たことである。肖像畫は三十餘點ある。皆或特種の契機を取つてゐる。その印象的契機の具合が日本の浮世繪に於けると似寄つてゐる。色はみんな灰がかつてゐる。自畫像は孰れも好ましくないが、「Sの肖像」(18)、「B、Lの肖像」(23)には洞察力と良い趣味がある。殆ど同數の風景畫があるが、やはり肖像畫と同じく、自然の或印象的

のフイジオノミイを捕へてゐる。それが印象派のは時間でいふ一瞬間の印象であるが、これは超時間的のある生動の印象である。色彩、筆觸ともにいゝ趣味だと云へる。畫品はまだ一寸觀念で説明の出来ない位新鮮である。他の人に見るやうなひとりよがり割合に少く、孰れも自然との融合を経験してゐる。いやな、また未熟な筆觸も「未完成」としての一要素となつてゐるのは幸福である。「二階より」の類集、そのうちでも(41)及び(48)、並に「原」(60)には稱するに足るべきデリカテッスがあつた。(19. x. 1913.)



筆 生 劉 田 岸

原



秋季の諸展覽會

雪 堂

ウイナス俱樂部の新設

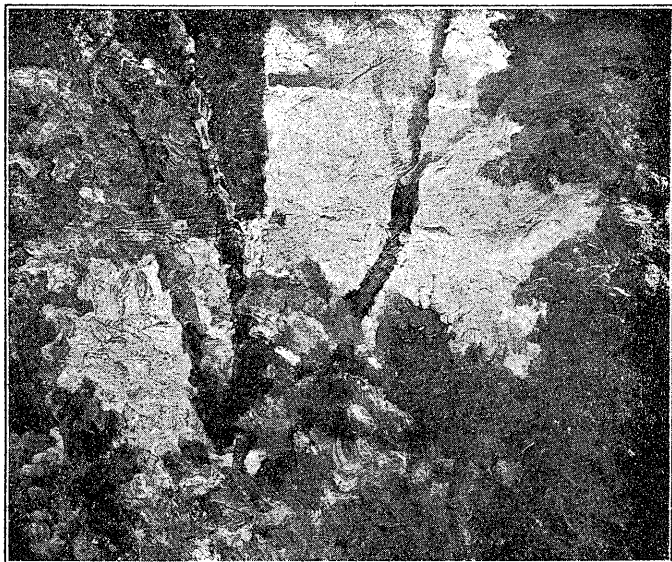
竹の臺陳列館の不完全なるは、今更言ふまでもないが、それも、年が年中、無休の姿で、我美術界には重寶缺くべからざる建物である。日本美術協會の陳列場は主として同會並に同會に最も縁故深き展覽會の開設せられる場所として、不完全ながらに、役立つて居る。併し孰れも形大に過ぎ粗雑に過ぎ、現下勃興せんとしつつある、個人の作品又は小人数の作品を陳列する小展覽會の會場としては、甚だ不適當である。其他泰文社の如き、虎の門俱樂部の如き、(三會堂は既に一般に貸さなくなつた)どうも不十分である、讀賣社樓上も、便利至極の地にあるに拘らず、之も小展覽會には稍廣く、慾を言へば、室の區別や採光の上に不便を免れぬ。それで小展覽會場の要求は、日に切なる形勢となりつゝあつた。今度木村梁一氏が個人經營を以て神田三崎町にウイナス俱樂部と云ふ小展覽會場を建設して、それが十月の初から開場することとなつたのは、洵に能く今日の我美術界の要求に適したものである。氏は身自ら洋畫家であり、且つ曾て佛國に渡航して親しく彼

筆 上 同 像 肖 の I. B.

地の小展覽會場を視察して来たこともあるので、今回建設せられたウイナス俱樂部も中々苦心設計せられたもので、最も採光に注意せられて居る、外觀は特記すべきほどではないが、此種の建築としては先づ適當である。壁の色と、床の敷物の事とは尙ほ考慮を要するかと思はれるが、大體に於て、細かな部分まで用意周到で、使用者に便利らしく見える。吾人は新に、此小展覽會場を得たことを喜び、之が大に利用せられて、興行的でない、眞に鑒賞的と謂ひ得る展覽會が大に興らんことを祈るものである。

梅原良三郎氏の油繪展覽會

ウイナス俱樂部の開場第一着に白樺社主催を以て、新歸朝者たる梅原良三郎氏の作品展覽會が開かれた。氏は京都の人で、元故淺井氏の門から出て、多年巴里に留學し、初め深くルノアールの畫風を慕うて其門に學んだ人であると、友人から聞いて居た。其



筆 上 同

りよ階二